

厚岸湖湖岸塩性湿地表層における植物遺骸の移動に関する研究

澤井 祐紀（国際日本文化研究センター）・那須 浩郎（総合研究大学院大学）

厚岸湖の周りや別寒辺牛川科の下流には、「塩性湿地（または塩性湿原）」と呼ばれる特殊な環境が広がっています。今はあまり見られなくなったアッケシソウがたくさん生えている場所と言った方が想像しやすいかもしれません。このようなところには、アッケシソウだけでなく珍しい植物が多く生育しているため、世界的にも貴重な環境であるといつて良いでしょう。この塩性湿地は、どのように姿を変えていくのでしょうか？私たちは、潮の満ち引きによって植物類の一部（主に種など）が移動する現象が重要であると考えています。このことは、アッケシソウなどの目に見える植物だけでなく、顕微鏡でなければ見ることができない小さな植物に関しても同じで、潮の満ち引きによって移動し、自分に一番良い環境を見つけて増えていくと考えられます。

私達は、潮の満ち引きによってどのように種や遺体の一部が運搬されるかを知るために、厚岸湖の北岸と南岸で調査を行いました。ハンノキ林、ヨシなどが多く見られる湿地（高位塩性湿地と呼びます）、アッケシソウなどが見られる塩性湿地（低位塩性湿地と呼びます）、アマモなどが多く見られる干潟で、表層の泥を採集し研究室で丁寧に洗いました。この作業と同時に、目に見えない藻類の一つ（ケイソウ類）を洗い出しました。洗い出したケイソウ類、植物類の葉っぱの分布を調べ、実際の生育地と比較した結果様々なことが分かりました。例えば、アッケシソウやヒメウシオスゲなどの種は、潮の影響をいつも受けているにもかかわらず、長い距離は運搬されないのです。これは種の大きさや重さなどが関係しているのかもしれませんが。これに対して、森林に生育する樹木の葉っぱなどには、非常に少ない数ですが干潟にまで流されている場合があります。風によって遠くまでとばされたのでしょうか？小さいケイソウ類に関しても数多くのことが分かりました。例えば低位塩性湿地では、いろいろな場所からケイソウ類の遺骸が流されてきます。干潟でも低位塩性湿地のように遺骸が流されてきますが、「流されすぎる」ために逆に殻があまり残らない環境であることが分かりました。

今回の調査で分かったことは、「植物の種がどのように流されてきて湿原が成長していくのか」ということや「化石で見られる種やケイソウはどこから来たのか」ということを考える上で重要な情報を与えてくれるでしょう。秋の塩性湿地に行つて、植物の葉っぱはどこから来たのか？目に見えないケイソウは今どのあたりを漂っているのか？といったことを考えながら、いつもとは違う目で湿原を見ると新しい発見があると思います。